

## 日本獣医師会雑誌 通巻 900 号 発刊記念連載特別企画

—各分野で活躍する獣医師のさらなる飛躍に向けて (V)—

国際的な獣医学教育第三者評価機関の認証取得と  
わが国の獣医学教育改革堀内基広<sup>†</sup> (北海道大学大学院獣医学研究院教授)

## 1 はじめに

わが国の獣医学教育改善の取組みに関する運動の経緯を振り返ると、先人の慧眼、熱意と努力には頭が下がる。1971年に日本学術会議が獣医学修業年限延長を勧告してから、2004年の「国立大学における獣医学教育に関する協議会」の報告に至るまでの活動は、元東京大学教授・唐木英明先生が、改善運動第1期(1971～1990年)、第2期(1997～2004年)に区分して纏められている[1]。また、当時の獣医学教育改革の論点は日本学術会議獣医学研究連絡委員会が纏めた「わが国の獣医学教育の抜本的改革に関する提言」に報告されている[2]。その中で、社会的な実務教育の要請並びに国際的獣医学教育に対応するために、獣医学教育は学部で行うこと、学術的に高度で実務能力の高い動物医学教育とすべきことが提言されている。

2008年に文部科学省に、大学における獣医学教育の在り方について調査研究を行い、獣医学教育の改善・充実を図ることを目的として「獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議(第1期)」が設置され、2011年に「今後の獣医学教育の改善・充実方策に関する意見のまとめ」が公表された[3]。現在、全国的に進展している獣医学教育改善の動きは、このまとめの中に「改善の具体的方策」として提示されている、

- ①モデルコアカリキュラムの策定
- ②分野別第三者評価の導入による獣医学教育の質保証
- ③大学間連携による教育研究体制の充実
- ④共用試験の導入
- ⑤学内教育環境の充実と外部機関との連携による臨床教育等の充実

の5つの柱である。モデルコアカリキュラムの策定は、

尾崎博先生(東京大学・当時)を委員長とする獣医学教育モデル・コア・カリキュラム調査・研究委員会の下、100名以上の獣医学・獣医療関係各位の尽力により平成23年度に初版が策定され、現在も改定が継続されている。分野別第三者評価は、中山裕之先生(東京大学・当時)が評価委員長として、2017年から大学基準協会による獣医学教育評価が始まり、2023年までにすべての獣医学教育組織が評価を受ける予定である。大学間連携は2012年に、山口大学・鹿児島大学共同獣医学部、岩手大学・東京農工大学共同獣医学科、及び北海道大学・帯広畜産大学共同獣医学課程、2013年には岐阜大学・鳥取大学共同獣医学科が設置され、連携によるスケールメリットを活かして、大学の特徴・教育資源を併せ持つ獣医学教育体制を開始している。共用試験は、高井伸二先生(北里大名誉教授)らの尽力により、NPO法人獣医系大学間獣医学教育支援機構(vetESO)が設置され、2017年から参加型臨床実習を実施する学生の基本的知識を評価するvetCBT及び基本的な臨床技能を評価するvetOSCEが開始された。これらの改善の取組みは、多くの獣医学関係者の熱意と献身的な努力、文部科学省、日本獣医師会等関係各位の叡智の結集により進められたものである。

## 2 獣医学に対する社会のニーズと国際通用性のある獣医学教育

続発する人獣共通感染症及び越境性動物感染症の克服、高度な獣医療による動物の健康維持と社会への安寧の提供、適切な獣医事の提供による食品衛生及び公衆衛生の向上、環境及び生態系の健全性の保全と維持、生命科学の進展による生命現象の解明とイノベーションの創出など、獣医学には社会から、動物、人、及び環境の健康維持と生態系の保全に関するさまざまな要請がある。言い換えると、獣医師は、「人と動物の健康及び環境の

<sup>†</sup> 連絡責任者：堀内基広 (北海道大学大学院獣医学研究院)

〒060-0818 札幌市北区北18条西9丁目

☎011-706-5293 E-mail: horiuchi@vetmed.hokudai.ac.jp

健全性は一つのもの」として考える「One Health」の理念の下、「人、動物、環境の健康・健全性を守るための、地域、国、あるいはグローバルなレベルでの、多分野、学際的な協力体制による問題解決への取組み」を進める One Health アプローチのキープレーヤーである。動物及び畜産物の貿易・移動も含めた安全保障は、国際的な枠組みでの取組みが必要な問題が多く、そこに携わる獣医師を育成する獣医学教育の国際通用性は、わが国の獣医事国際信用性を保つために重要である。

獣医学教育の国際基準なるものは存在しないが、日本の獣医学教育組織が欧米に比べて小規模であることは歴然とした事実であった。一方で、伴侶動物分野における高度獣医療の提供、国際的枠組みの中での家畜衛生及び食品安全対策、グローバルな視点での生態系保全、国内外の社会のニーズに対応した獣医師養成教育の実施、学術的に優れかつ実務能力の高い獣医師の育成、国際通用性が担保された教育の質保証と継続的な改善の取組みなど、獣医学教育に対する要求は、小規模組織の自助努力で改善できるレベルをはるかに超えていた。個々の獣医師の能力が優れていても、国際社会における日本の獣医学教育の地位の失墜が現実味を帯びていた。2009年3月に、社会・経済のグローバル化が進む中、国際的な競争を含め教育研究及び社会貢献機能の強化を促進する大学間連携の仕組みとして、大学設置基準が改正され共同教育課程の設置が可能となった。これを契機に、2012～2013年に、4つの共同獣医学部等が設置された。この共同体制により、わが国に、学生定員が60～80名、教員が70～90名程度の獣医学教育組織が誕生した。獣医学教育における大学間連携の目的の一つは、スケールメリットを活かして国際通用性のある獣医学教育を実施することにある。北海道大学-帯広畜産大学共同獣医学課程 (VetNorth Japan, VNJ)、及び、山口大学-鹿児島大学共同獣医学部 (VetJapan South, VJS) は、国立大学改革強化推進補助事業「国立獣医系4大学群による欧米水準の獣医学教育実施に向けた連携体制の構築」(平成24～29年、代表校：帯広畜産大学) (以下「4大学連携事業」) の支援を受けて、国際通用性のある教育体制の整備と、その成果をわが国の獣医学教育改善に還元する取組みを実施した。伴侶動物及び生産動物獣医療に係る実習の大幅な単位増と人員整備、学外機関との教育連携強化、教育改善の質保証の取組みの実質化など、大幅な教育改革に取り組んだ。そのマイルストーンとして、実施する教育の国際通用性の評価を受けるため、国際的な獣医学教育の第三者評価機関である欧州獣医学教育機関協会 (European Association of Establishments for Veterinary Education, EAEVE) の認証取得を目指した。

わが国の医学教育組織は、米国医師国家試験受験資格

審査 NGO 団体 (ECFMG) が2023年以降は、国際基準で認定を受けた医学校の出身者にしか申請資格を認めないことを宣言したことを受け、2017年に日本医学教育評価機構が世界医学教育連盟から医学教育分野別評価の認定を行う機関として正式に認証を受け、日本の医学教育組織における国際基準に準拠した医学教育の実施を評価している。一方、VNJとVJSは各々が実施する獣医学教育の国際通用性をEAEVEから直接評価を受ける方法で進めた。

### 3 国際的な獣医学教育の第三者評価機関による評価

国際的な獣医学教育の評価機関として、EAEVE、アメリカ獣医師会 (AVMA)、Australasian Veterinary Boards Council (AVBC) など5つの団体がある。われわれは、加盟校の多様性及び卒業生が進む職域の類似性からEAEVEの認証取得を目指した。アメリカでは、4年のカレッジを卒業してから獣医師となるために獣医学に進学するのに対し、欧州では高校卒業から獣医系大学への進学の流れが日本と似ていることも、EAEVEの認証評価を目指す要因の一つになった。

EAEVE 認証校を訪問して認証を受けるための必要事項を調査する一方で、EAEVEの専門家を招聘して、施設、教育及び組織運営体制について非公式に指摘を受ける機会を設けて課題を指摘してもらい、認証取得に向けて不十分なソフト面及びハード面の改善を進めた。2017年にEAEVEの事前公式審査を受けるまで3年以上の準備期間を要したことが示すように暗中模索であった。EAEVEの事前公式審査 (Consultative Visitation, CV) のSOP (SOP2016) に従い、2017年4月に自己評価書 (Self Evaluation Report, SER) を提出し、2017年7月にCVを受審した。CVでは3名の審査委員が来日して現地視察、インタビューを実施した。そこでは3項目の主要欠陥事項 (Major deficiencies) と8項目の非主要欠陥事項 (Minor deficiencies) の指摘を受けた。

#### Major deficiencies

- ・VNJの組織運営に対する学生、若手教員及び関係団体の関与が不十分
- ・伴侶動物並びにウマの24時間/7日の診療実習の欠如
- ・北海道大学の病理解剖施設が不適合

#### Minor deficiencies

- ・学内の臨床実習を補填・強化するための学外実習が不十分
- ・バイオセキュリティを推進するための改善方法 (QA ループ) が不十分
- ・動物福祉の推進が不十分
- ・特に伴侶動物の病理解剖数が不十分

- ・いくつかの動物種の症例数や教育が不十分
- ・食品衛生に関する学外実習と病畜由来の死体及び臓器を用いた実務実習が不十分、他2項目

以上のように、新規組織の構築が必要な事項、動物病院の機能強化が必要な事項、学外機関が必要な事項、カリキュラムの整備が必要な事項、あるいは施設整備が必要な事項などさまざまであった。一方で、本審査 (Full Visitation, FV) に向けての改善ポイントが明確となった。指摘事項の中には、馬の救急獣医療のように、欧州と日本の馬の飼育形態の違い及び実際の症例を用いた大学での教育実施を考えた場合に実現性が難しい事項も含まれていた。CVの質疑応答で日本の現状を説明したが、EAEVEとしては「必須」との見解であった。また、めん羊、豚、あるいは鶏のように産業構造及び動物の飼養形態から症例や実習場所の確保が難しい動物種の問題も含まれていた。VNJでは「国際水準の獣医学教育の実施」を共通目標に、2019年7月にFVを受けることを決め、対応が必要と思われる事項の改善に努力した。FVの2カ月前までにSERを作成・提出する必要がある。SOP2016に従い、組織運営、財務、カリキュラム、施設・設備、教育に活用する動物資源、学習資源、学生選抜・福利厚生、学生評価、サポートスタッフ、研究、及び質保証、の計11のStandardについて記載するが、必要なデータの収集・整理を含め、担当された先生方の心労と負担は紙面では到底説明できない。2019年7月に、EAEVEの専門家8名からなる審査委員団が帯広畜産大学及び北海道大学を視察し、Standard毎のインタビュー、教員、学生、職員、及び同窓生との面談を実施した。9項目の高評価項目及び3つのMinor deficienciesの指摘を受たけが、Major deficiencyのない完全認証を取得した。本審査におけるMinor deficienciesは以下の3点である。

- ・食肉衛生・食肉検査の実習が不十分
- ・教育に関与する一部の教職員に対する教育法の教授が不十分
- ・教職員の昇任に関する基準が不明瞭

事前公式審査及び本審査を通じて、馬の24時間診療の実施のように日本に当てはめることの適切性に疑問を感じる事項はあったものの、指摘事項の多くは公平かつ当を得たものであった。獣医学教育の内容に直接関係する事項ではないが、EAEVEの審査員は評価実施の研修を積み、全体の審査スケジュールは審査を受ける側にとって改善点が確認できるよう設計されており、完成度の高い評価を実施している点も大変参考になった。認証取得の過程で日本の学部6年間の教育で育成する「獣医師像」が曖昧であり、獣医学教育の現場として「現状でできる」ことから「やらねばならない」ことの意識改革の必要性を痛感した。一方で、「国際通用性のある獣医

事・獣医療を提供する獣医師」と、「前例の無い事柄の解決に必要な客観的な科学思考力を備えた獣医科学者」を育成するバランスは、解決が容易でない課題である。

わが国の獣医サービスは、OIEのPerformance of Veterinary Service評価で高い評価を得ている。また、WHOは国際保健規則を制定して各国の公衆衛生事象の対応能力の外部評価を実施しているが、わが国の人獣共通感染症など獣医サービスと密接に関連する分野でも高い評価を得ている[4]。このようにわが国の獣医サービスは国際的に高い評価を受けているが、その担い手である次世代の獣医師を養成する獣医学教育の国際通用性は、大学と関係機関が共通認識を持って取り組むべき課題である。

#### 4 EAEVE 認証取得後の方向性

「4大学連携事業」では、認証取得の過程で得た経験等を、わが国の獣医学教育の改善に還元することも求められている。酪農学園大学はEAEVEのCVを受け、認証取得に向けて活動している。すべての日本の獣医系大学が国際的な認証を取得する必要があるかはさておき、国際的な動向及び国際通用性を意識した上で、日本における獣医療・獣医事への社会の要請に対応できる獣医学教育とその基準の構築は必須である。現在進行中の大学基準協会による分野別認証評価は、2023年までに全獣医系大学が評価を受ける予定である。その成果を検証して、国際通用性と社会の要請に応える獣医学教育を意識した評価項目の見直しが必要になるとと思われる。VNJとVJSはEAEVEの認証取得の経験を確実に還元する責務がある。また、将来に向けて日本の獣医系大学は養成する獣医師像をより鮮明に持つ必要があるが、必ずしも欧米同調である必要はない。EAEVEの認証取得の過程で、卒業論文研究を含む学術的総合力の高い教育は高く評価された。一方で、従前から、獣医療・獣医事の実務能力の高い獣医師の育成が求められている。さらに、国家の枠組みを超えた獣医事の必要性から、国際感覚・異文化理解力に優れた人材の育成も必要である。学術力、実務力、及び国際性のバランスを保つことは容易ではないが、個々では非凡な能力と可能性を有する日本の獣医系大学及び獣医療・獣医事関連組織が叡智を絞り、これまで以上に協力することで、その実現は可能であり、その先に国際通用性は担保されるが欧米追従型でない第3極の獣医学教育体制の具現化が期待される。

アジア地域は、熱帯から亜寒帯、海拔ゼロから3,000メートルを超える地理的にも文化的にも著しい多様性を有する。アジア圏を一つの社会経済圏と位置づける場合、多様性に富む域内での獣医事を画一的な基準で纏めることは困難と思われる。域内における獣医学教育の振興と獣医療・獣医事の高度化を図るためには、学術力、

実務力、国際性のバランスに優れた獣医師養成体制が重要な役割を果たすと思われる。

2019年にソウル大学はAVMAの認証を取得した。また、チュラロンコン大学はEAEVEの認証取得を目指しCVを受審済みである。香港城市大学の獣医校はAVBCの暫定認証を得ている。アジアには、規模及び能力ともに日本の獣医系大学を上回る獣医科大学が現れている。アジア圏で獣医学教育を先導するためにも、日本の獣医系大学及び関連機関は戦略的な連携が求められる。

## 5 おわりに

EAEVEの認証取得の課程で、VNJは「継続的な教育改善を可能とする自律的な教育の質保証（Quality Assurance, QA）に取組む組織力」という貴重なコンピテンシーを修得した。大学改革支援・学位授与機構が実施する機関別認証評価、国立大学法人評価委員会による評価などもQAの一環である。しかし、評価書の作成に腐心して、本来の目的であるPDCAサイクルを回して改善を進めることへの意識が薄かったと反省しきりである。EAEVEの認証は第三者評価の必要性と有用性を再認識する機会となった。

VNJのEAEVE認証取得は、「4大学連携事業」による、

VNJとVJSを構築する4大学の連携、及び、欧州の獣医校との友好関係の構築と情報収集に尽力した諸先生の努力なくしては実現しなかった。VNJに関しては、帯広畜産大学の国際認証推進室の倉園久生教授（現徳島大学）及び川本恵子教授（現麻布大学）の先導、及び、両大学の教職員が一丸となって取り組んだ結果である。欧州の獣医学教育事情に明るく、初期の活動をお導きいただいた橋本善春先生にも敬意を表したい。改めて関係各員に感謝申し上げる。

## 参 考 資 料

- [1] 唐木英明、獣医学教育改革運動の反省と今後、日獣会誌、28、148-151（2005）
- [2] 日本学術会議獣医学研究連絡委員会：わが国の獣医学教育の抜本的改革に関する提言（2000）、(<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/17youshi/1735.html>)、（参照2021-12-01）
- [3] 獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議：「今後の獣医学教育の改善・充実方策について」意見のとりまとめ（2011）、([https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2011/05/23/1306202\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/05/23/1306202_02.pdf))、（参照2021-12-01）
- [4] 釘田博文：獣医サービスとワンヘルス、日獣会誌、72、124-129（2019）